

学校名：東京都墨田区立両国中学校



氏名：輪湖 みちよ

[担当教科：社会科]

● 実践教科等：社会科(地理)、総合、
道徳

● 時間数：7時間(社5、総1、道1)

● 対象生徒：一学年

● 対象人数：225人

1 単元名

社会科：地理的分野 第1編 世界のさまざまな地域

第3章 世界の諸地域 第3節 「アフリカ州」

〈主題〉「**よりよいアフリカ州をめざして～アフリカ州の持続可能な発展～**」

『新しい社会 地理』(東京書籍)、『アドバンス 中学地理資料』(帝国書院)

2 単元の目標

- (1) アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、意欲的に学ぶ態度を身に付ける。
(つながりを尊重する態度)(進んで参加する態度)
- (2) アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、多面的・多角的に考察した上で適切に判断し、表現する能力を養う。(多面的、総合的に考える力)(未来像を予測して計画を立てる力)
- (3) アフリカ州の地域的特色について資料から読み取ったり、資料を活用して、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考えたりする活動を通じて、資料活用の技能を身に付ける。(批判的に考える力)
- (4) アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色について理解を深め、その知識を身に付ける。

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

・アフリカ州の地域的特色や人々の思いに気づく【多様性】

・アフリカ州の産業の特色であるモノカルチャー経済の問題点に気づく【有限性】

4 単元の指導について

(1)教材観

世界の諸地域を学習するねらいは、世界の諸地域の地域的特色について基礎的・基本的な知識を身に付けることである。本単元では、生徒の身近にあるアフリカ州の産物を学習することで、自分の生活と結び付いているという実感を引き出す。また人々が貧困の中で生活していることを学習することで、豊富な農産物や鉱産資源をもつ州の人々の生活に課題があるのはなぜなのか、関心をもたせたい。その上で、主題について学習内容をもとに考察させることで、アフリカ州の地域的特色を理解し、地域的特色を生かしたよりよい発展について主体的に考察させたい。

(2)生徒観

世界の諸地域を学ぶことに対する関心は概ね高く、旅行やTVなどで得た知識を披露する生徒もいる。諸地域についての理解が自然環境中心であったり、資料の選択・読み取りに苦手意識をもつ生徒が多数存在したりといった現状から、資料を活用して多面的・多角的に地域的特色を理解することが課題である。また、適切な判断・表現力については、既習の地域において、評価規準を明記した上で、地域的特色をいくつかの観点からまとめる活動を行っており、今後も継続していく。ESDの視点で地域

的特色をとらえる学習活動は南アメリカ州で体験してはいるが、ESD の視点を含んだ主題を追究する学習活動は今回が初めてということもあるため、多様な意見を聞きながら、自分の意見を深めていくことを期待する。また、生徒アンケートの結果にみられるように『意識を行動に移す機会が少ない』という生徒に行動の機会を提供することで、生徒の実践意欲を高めていく。

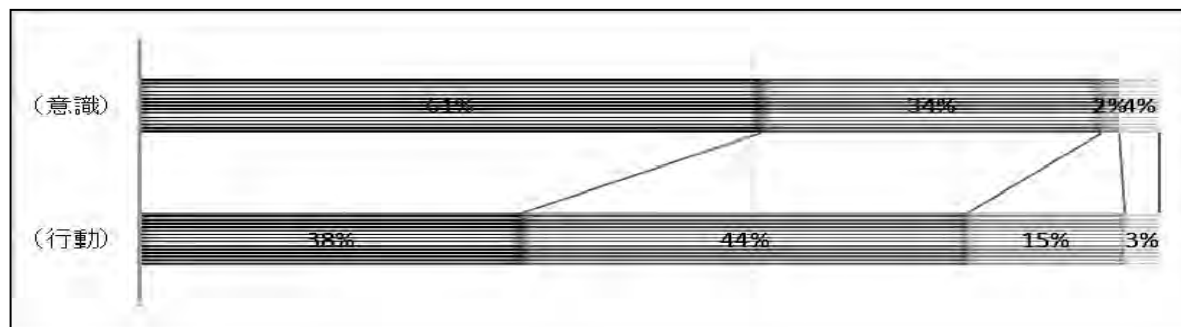
【7月に行った生徒アンケートの結果】

(国際貢献に対する意欲・実践についての項目)

世界の苦しんでいる人や悲しんでいる人を見て、何かをしたいと思うこと

(意識)とても大切 61%、大切 34%、あまり大切ではない2%、全く大切ではない4%

(行動)よくする 38%、する 44%、あまりしない 15%、全くしない3%



(3)指導観

中学校1年生の生徒にとって、アフリカのイメージは自然が豊か・砂漠・貧困・紛争といったものが多く、マイナスイメージが強い。豊かな自然については、国立公園や動植物の写真を用いて、肯定的にとらえることができるようにする。貧困・紛争については、歴史的背景の読み取りや鉱産資源、産業の特色について理解することで構図がわかり、解決策を考えるヒントとなるように授業を構成する。また、身の回りにあるものと、アフリカ州の産物との関わりを知る活動を通して、自分たちの生活との関わりを見いだしながら、アフリカ州の持続可能な発展やよりよい世界のためにできることについて考えることができるようにしたい。

5 評価基準

【社会科】

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象に関する知識・理解
評価規準	アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、意欲的に学ぶ態度を身に付けようとしている。	アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、多面的・多角的に考察した上で適切に判断し、表現している。	アフリカ州の地域的特色について資料から読み取ったリ、資料を活用して、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考えをまとめたりしている。	アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色について理解を深め、その知識を身に付けている。
評価方法	学習の様子 ノート ワークシート	ワークシート	ワークシート	確認テスト 定期考査

【総合的な学習の時間】

・アフリカ州で活躍する JICA 青年海外協力隊員やシニアボランティアの活動に興味をもち、ザンビアの

生活状況や課題、解決策について資料を活用して追究することができたか。

【道徳】(自己評価)

・アフリカ州で生活する子供の想い・ねがいをとらえ、国際貢献の意欲を高めることができたか。

6 単元の構成

【社会科】

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカ州の地域的特色① (自然環境・人口・生活・文化・歴史的背景)	図や資料の読み取りを通じて、アフリカ州の地域的特色をとらえる	・アフリカ州の位置 ・アフリカ州の代表的な国々の位置と名称 ・アフリカ州の地形 ・アフリカ州の歴史的背景(年表・国旗) 【ザンビア国旗、独立秘話、ビクトリアの滝、動物】
2	アフリカ州の地域的特色② (産業／農業)	アフリカ州の多様な農産物を図から読み取ったり、農業の特色を歴史的背景から理解したりする	・アフリカ州の農産物 ・アフリカ州の農業の特色 ・アフリカ州の農業の課題 【ザンビアマーケット】
3	アフリカ州の地域的特色③ (産業／鉱工業)	アフリカ州の多様な鉱産資源を図から読み取ったり、工業製品・貿易相手国の特色を歴史的背景から理解したりする	・アフリカ州の鉱産物・工業製品 ・アフリカ州の鉱工業の特色 ・アフリカ州の鉱工業の課題 【ザンビア銅板】
4	よりよいアフリカ州をめざして① モノカルチャー経済下での人々の生活	モノカルチャー経済の下での生活を資料から読み取り、モノカルチャー経済の問題点と解決策を考える	・アフリカ州の課題 ・アフリカ州の課題と世界(日本)との関わり ・課題解決に向けての努力 【アフリカ州における JICA の活動】
5	よりよいアフリカ州をめざして②	既習内容であるアフリカ州の地域的特色を生かした、よりよいアフリカ州をめざすための方策を考え、根拠となる資料を基に説明する(スピーチ)	・アフリカ州の地域的特色 ・よりよいアフリカ州に向けての解決策 ・考えの根拠となる資料

【総合的な学習の時間】

時限		学習のねらい	授業内容
1	ザンビアの人々の生活と JICA の支援活動	・ザンビアで行われている JICA の活動を知る ・今や未来の自分たちにできることを考える	・JICA で活動している人の写真から、どのような支援をしているのかを考える。(一斉) ・今の自分にできること、未来(26 歳)の自分にできることを考える。(グループ) (JICA「世界の笑顔のためにプログラム」への参加呼びかけ)

【道徳】

時限	項目	学習のねらい	授業内容
1	4-(10) 国際理解・国際貢献	世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する	・アンケート結果をもとに、国際貢献についての両中生の意識と行動を確認する ・アフリカ州に住む子どもたちの状況を知って、どのような想いをもっているのかを考える ・アフリカ州の子どもたちと話し合うという設定で、想いをもとに、どのようにしたら世界の平和と人類の幸福に貢献できるかを考える

7 授業事例の紹介

道徳 4-(10)国際貢献

(1) 指導案

(ア)実施日時 平成 27 年 12 月 10 日(木)第4限

(イ)実施会場 墨田区立両国中学校1年5組教室

(ウ)本時の目標

世界の子どもの現状を知り、どのような想いをもっているのかを考えることや彼らと一緒にによりよい世界をつくるためにできることを考える活動を通して、世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

(エ)指導のポイント

社会科、総合的な学習の時間を通して、(1)アフリカ州でモノカルチャー経済の下、貧困や病気で苦しむ人々がいること。(2)アフリカ州の地域的特色を生かした、モノカルチャー経済の解決策。(3)今の自分と 13 年後の自分にできることを考えてきた生徒たちである。また、夏休み前には『JICA 出前講座』を受講し、夏休みには課題として『JICA エッセイコンテスト』に参加しており、ワークシートや感想、エッセイの内容を見ると国際貢献の必要性を感じ、『できることがあればしたい。』という想いを表現する生徒が多い。一方、生徒アンケートの結果や『JICA 世界の笑顔のためにプログラム』への参加生徒の少なさからは、想いを行動に移すまでにはいたらない生徒が大多数を占めている。今回、物語などから実際にアフリカ州で生活する同年代の実態を知り、どのような想いでいるかを想像したり、彼らと一緒に世界をより良くする方法を考えたり活動を通して、国際貢献の意欲を高めたい。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10 分	学習内容の把握	資料配付、生徒アンケート結果提示(国際貢献への意識・行動について) 補助発問 『今、欲しいものや必要なものは何ですか?』 →〇〇したいなど、想いがあるから手に入ると嬉しい	一斉	自分の身近な出来事から、想いがあるからこそ、叶えられると嬉しい。ということに気づくことができるようにする。	
アフリカ州の子ども達はどのような想いをもっているのだろうか?					
展開 35 分	アフリカの子ども達の現状	資料朗読	一斉	データや文章、写真などにより、その子がおかれた状況を理解し、想いを想像することができるようにする	
	アフリカ州の子ども達 ①ウガンダ(学習に必要な教材を購入することが難しい12歳) ②ルワンダ(大量虐殺で父を亡くした25歳:パトリスくん) ③ザンビア(勉強することが大好きな14歳:アリスちゃん) ④ナミビア(街で唯一の公共テニスコートで学ぶ15歳) ⑤シエラレオネ(12歳で子ども兵士になった15歳:ムリアくん) ⑥日本(国際貢献について考え中の13歳)				
	アフリカの子ども達の想い	活動内容説明 ワークシート配布 (1)班ごとに①～⑥の役割分担をし、ほしいもの・こと、必要なもの・こと、希望するもの・ことを個人で考え、ワークシートに記入する。 (2)班で話し合っほしいものや夢など、どのような想いで生活しているのかを考える →発表 (3)①～⑥の役割が集まる班をつくり、それぞれの想いを生かすより良い世界のイメージ	グループ	役割分担をじゃんけんで行うこととで、生まれる場所は選べないからこそ、平等でなければならないと気づくことができるようにする。  様々な立場に立って、国際貢献とは何かを考えることができるようにする。	A～D、4段階の自己評価 (ワークシー
	皆の想いを生かし				

終末 5分	たより良い世界	と、より良い世界を目指すためにできることを考える →発表		ト) ・授業に意欲的に取り組んだ ・国際貢献への意欲が高まった
	国際貢献について	・国際貢献についての想いを聞く。 ・授業を振り返り、感想を書く。		

(2)授業の振り返り

社会科の時間、総合的な学習の時間とのつながりで考える生徒が多かった。今までの活動を思い出しながら行ったことで考えの広がりや深まりをみることができた。また、アフリカ州の子ども達の実態から、その思いを考える場面では実態に衝撃を受けながらも意欲的に取り組むことができていた。話し合いによって、よりよい世界のためにできることを考える場面では役割演技をしながら、自分のこととして考えている様子もみられた。

(3)使用教材

アフリカの子ども達の想い、ザンビアの中学生の夢、生徒スピーチ原稿(一部)、生徒アンケート結果

(4)参考資料等

『世界の笑顔のためにプログラム 期待効果(テニスボール・ナミビア)』

『ダイヤモンドより平和がほしい』『ルワンダの祈り』 後藤健二著 汐文社

『地図でユニセフ』 財団法人 日本ユニセフ協会(ユニセフ日本委員会)

8 単元をととした生徒の反応/変化

・社会科ワークシート(スピーチ原稿)の記述

『私はアフリカ州をよくしたいという想いで来ました。』

『砂漠を開拓して公害の少ないハイテク工場を作り、働く場所をつくり、工場の土地代で生まれたお金で水道を引いたり、食料の輸入を行ったりして、健全な州を目指す』

『日本にいる我々がアフリカ州の産物を買ったり、農作物の効率が良い収穫方法やその地形に合った物を作ったりしていく。アメリカ、中国などだけでなく、違う国とも関わっていくことで、みんなが平等に暮らすことができる州を目指す』

『人間からすれば、建物などを建てるために、動物がいる場所を使っているけど、動物からすれば、大切なすみかを壊されている。動物を傷つけてお金を壊すのではなく、動物の暮らしている場所を、動物に迷惑をかけない程度に観光スポットにする。そうすると、世界の人々がこの州に来て、州の良いところを知り、自分の国に広めて、この州に行きたい！と思う人がもっと増え、貧しい暮らしが少しでも良くなることを目指す』

『世界の多くの国が協力して、アフリカ州のためにできることを行う。特に、植民地時代に植民地支配を行っていた先進工業国が技術を教えるなど、ヨーロッパ州を中心に日本も世界もつながることが大切。子どもたちが夢を持って、叶えられ輝ける州を目指す』

『紛争が多いアフリカ州。EU のように、州が一つにまとまっていけると良い。しかし、これはたくさんの部族が住むこの州では厳しい。解決していくにはみんなで話し合うことが必要。平和で安全で楽しい生活ができる州を目指す』

→アフリカ州の特色をもとに、よりよいアフリカ州をめざす方策を意欲的に考える生徒が多かった。

・総合・道徳ワークシートの記述(感想)

『私は正直、できることが身近にあるならば協力するけれど、少し手を伸ばさないと協力できないなら、協力しないでいいやという考えでした。しかし、アフリカ州の子どもたちの生活を知って、私たちが思っている以上に、国によっての差があるのだと知り、改めて驚きました。これからは、少し手を伸ば

してでも、協力できることはやってみます。』(JICA 世界の笑顔のためにプログラムに参加)

『話し合いを通して、自分の夢を叶えることが貧しい人のためになることもあるのではないかと思います。班の皆の意見は、すべてがよりよい世界につながる意見で、募金やお金だけでできること以外にも、人間関係を深める・交流するなどの意見があって、アフリカ州の子どもの身近に感じようになりました。文通など、してみたいです。あと、自分なりに目標に向かって取り組むことが大切だとも思いました。』

→JICA リソースの活用によって、意欲を行動にうつすことができた生徒や、国際貢献について多様な考えをもつことができた生徒がいた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教科の特性や、自分の分掌を生かしてほぼ計画通りの実践を行うことができたことが一番の成果。教科・総合・道徳と、多くの時間を用いたことで生徒の中で教科においては、アフリカ州の地域的特色を理解した上で、アフリカ州をより良くするための方策を考えることができた。また、総合や道徳においては『国際理解・国際貢献』に対する意欲が高まり、行動に結びついた生徒もいた。いずれの授業実践においても、ザンビアで見聞きしたこと・手に入れた教材を示したことが生徒の関心・意欲をひきだすことにつながった。また、特に『世界の笑顔のためにプログラム』への参加呼びかけは、ザンビアで一番大きく日本の国際協力活動の意義を感じたことと結びつけて行うことができ、生徒の想いを行動に移す機会ともなった実践であった。課題としては、授業の評価についてと、日本にいながらにして世界のことを考えることの難しさがあげられる。評価については、通常の授業と同様、信頼性・妥当性が求められることに加えて、ESD の視点からみて、生徒に必要な力が身に付いたかどうかということについてどう評価していくのが課題となる。この点については、他の参加者と授業実践を共有しながら、共に考えていきたい。また、日本にいながらにして世界を考えることの難しさについては学校の授業でどんなに世界の現状を想像し、考えたとしても現実の社会生活の中で生かしていくことは難しい。この点については、JICA のプログラムなどを活用して外部団体の支援・協力を得ながら、今後とも引き続き教科・総合・道徳などの授業で『国際理解・国際貢献』について学ぶ機会を設けていきたい。

このように、授業を実践する中で教員自身の ESD や『国際理解・国際貢献』に対する意欲が高まり、知識が身に付いたことも成果としてあげられる。課題としては、身に付いた知識を生かした実践によって、他の教員の ESD や『国際理解・国際貢献』に対する意欲を高めたり、知識を深めたりすることである。この点については、次年度以降に実施予定のオリンピック・パラリンピック教育において、ザンビアで青年海外協力隊として活動していた現 IOC の方を招いて講演を行うこと。国際理解教育として、本校の卒業生である現ザンビア事務所所長を招いて講演を行うことを企画している。今回は学年の実施であったが、これは学校全体の取り組みとして行うものであり、有効であると考ええる。また、次年度以降も継続的にキャリア教育や人権教育、道徳教育、社会科教育の一環として継続的にザンビアで得た JICA リソースを活用していくことを計画している。その中で、生徒が視野を広げたり、思考を深めたりするだけでなく、主体的に国際協力活動に参画することをねらいとしていく。

10 教師海外研修に参加して

教師海外研修に参加し、授業実践を行うことで参加する前に抱いていた『直接見聞きした世界の現状を生徒に伝え、共に考えたい』という想いが十分に満たされた。また、外部講師を招いた一過性の国際理解教育ではなく、常に生徒のそばにいて変容をみとる役目の教員が国際理解教育を行うことは、生徒一人一人の発達段階や考えに応じた指導や支援が可能になることから、生徒の意識変容に有効に活用できると考えている。

今後は、この意欲を忘れずに授業実践を見直ししながら、今後の教育活動にも教師海外研修の成果を生かし続けていく。そのために、教科・総合・道徳以外にも、人権教育やキャリア教育や安全教育など様々な教育活動の中に、国際理解教育や ESD の視点を盛り込んだ計画をたてて実行し、見直してさらに実行するということを研修会や研究発表などで新しい情報を取り入れながら続けていく。

そうすることで、生徒の中から将来国際協力活動に関わる生徒がでてくれることを願っている。そのことこそが、教師海外研修の本当の成果であると考ええる。

一度しか参加できない教師海外研修だからこそ①研修を通して友好親善②帰国後の授業実践を通して日本社会に還元③関わった生徒が将来、開発協力を携わる『一粒で三度美味しい』を合い言葉に実践を続けていきたい。一人一人の幸福が、地球全体の幸福につながることを心から願って。